



Title	<書評>辻公也編「九州のかたち 現代工芸」西日本新聞社, 1975. 7月
Author(s)	佐藤, 敬二
Citation	デザイン理論. 1975, 14, p. 94-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53751
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

辻 公也編

「九州のかたち 現代工芸」

西日本新聞社, 1975. 7月

日本全国の手仕事に携わる人々や新しい工芸の仕事を目指す人々が集まり、自分達の生活や仕事のこと、社会とのかかわり合い、日本人の生活の将来について、真剣に語り合い広く交歓し合う日本クラフトフェアは、今年も京都で開かれた。クラフトマンに与えられた、多くの人々や機関の励ましと多大な援助に感謝し、またクラフト運動を支えて来た多くの同志の努力を喜び合うというこの会議も、第3回目をむかえて、伝統産業振興法と社会経済の変動の渦の中にあって、色々な批判や問題を生み出して來たが、今年は4つの分科会（クラフトにおける伝統とは何か、クラフトの商品価値とは、新しいマテリアルのとらえ方、芸術とのかかわり合い）に分れて、現場にたずさわる人々の活発な意見のやりとりのもとに幕を閉じた。

クラフトフェアに先立つ2ヶ月前の7月に西日本新聞社より一冊の豪華本が出版された。「九州のかたち 現代工芸」という本であるが、これは現代工芸の風土記九州版とでも云えるものである。辻公也氏と津田欣一氏が本文で「ふるさと九州で育ちつつある手づくりの仕事のいくつか。それも工業化を拒否し、流通機構に乗ることを拒む閉鎖的なそれではなく、暮らしの中に溶け込んでいる生活用具と、その生産プロセスをみつめようとするとき、どうしても素材である木や竹、あるいは土に行き当たる。だから、クラフトを求める旅は、海辺よりむしろ内陸部へと車を走らせることが多かった。それでいて、終始、身のまわりに光る海を感じ、胸のなかに、ある広がりを覚えたのはなぜだろうか。」と書かれているように、この本は全編を通じて、詳細な資料と、今にも物作りの仕事場の音が聞こえて来そうなルポが主体となっている。編者は九州クラフトデザイナー協会(KCDA)前理事長であった九州産業大学芸術学部教授の辻公也氏。他にKCDA理事長であり大分県日田産業工芸試験所の宮崎珠太郎氏など、工芸デザイン指導者や工芸研究家、ジャーナリスト、歌人などが各分野を担当、執筆しており、豊富なカラー写真と資料、ルポが一体となって九州の工芸品の美しさ、実用性、そして問題点などが一読してわかる。生活の中に生きている手工業品——染織、竹工、木工、籐細工、柳細工、花むしろ、漆工などを九州各地の現地

に訪ね、8年間もかけてその歴史と現状を集成したもので、200ページを越す大型豪華本となっている。

今回収録された分野は、染織では久留米絣、島原本綿、肥後木綿、天草更紗、薩摩絣、大島紬、薩摩結城、綾つむぎ、佐賀錦、鍋島鍛通(だんつう)、博多織など。

竹工では編組、小山田、別府の竹製品、都城の弓づくり。

木工は都城、日田、大川の木工、博多の曲げ物。

漆工は宮崎、鹿児島、久留米。そのほか小林の簾細工、宮崎の柳細工、基盤、薩摩のつづくし、都城の木刀など。とまことに豊富でありまたくわしい。

たとえば久留米絣では、「洗うたびに冴える色」「気負わずあせらず」「手しごと30の工程」「金で買えぬ物」「藍の花を美しく」というセクションに分け、松枝玉記さんという重要無形文化財、藍染技術の保持者をたずねている。久留米絣の出来るまでの30工程の詳細な技法説明から、歴史的な解明、また現代の事情、そして伝承の話へと進め、伝承を継ごうとしている人、大学ではデザインを専攻している松枝さんのお孫さんのエピソードが書かれている。

染織、竹工、木工、簾細工、花むしろ、漆工などの分野においても特に問題になっているのは、伝統技術とその伝承、若もの達の生き方のことであるようだ。次に編者の辻氏の話と、木材工試の飯田正毅氏の大島紬の話と、同じく若者達の物づくりのグループの紹介をされている、日田産工試の宮崎珠太郎氏の話を紹介しておきたい。

昭和のはじめまで、どの町にも、どの村にも何軒かの紺屋があり、自分達が着るものは同じ地域の顔見知りの人達の手になったという。それらの店では、正月やお盆を迎える前は、つましやかではあるが、知り合いや家族が装う晴れ着を染めあげるのに夜なべがつづいた。そういう物つくりの老人たちが近年まで何人かいたのであるが、最近とみに少なくなった。島原地方も例外ではなく、辻公也氏が島原に素朴で、味わいのある木綿織があると聞いて、平田さんという人を昭和44年にたずねた時に、すでに自家用としてのみ織っていたという話である。(昭和10年頃は10軒前後の機織場の他問屋もあった。) 肥後木綿も同じく宮崎染織店というのが一軒有るだけであり、肥後木綿の取り扱いは商品の20%にすぎないらしい。辻氏はここにも伝統工芸のあり方のむずかしさを見たと述べている。

大島紬については飯田氏が2つの問題点に絞って書いている。伝統の泥染めを守れ……という問題と、韓国への技術流出についてである。色大島の氾濫と、韓国の低人件費に着目した結果の技術と、それにともなう日本への紬の多量輸入の事を憂いつつ、「試練の風は今後業界になお吹きつけるだろうが、泥紬あっての化染という基本姿勢をくずしてほしくないものである」と結んでいる。泥染めを忘れた大島紬は考えられないと云う。

一方綾つむぎのように若者たちが集って工房を作り、しっかりとした目標で物づくりにはげんでいる所もある。「売るためのものは最初から念頭になかった。手を変え、品をかえてまるで洪水のように生み出され、氾濫する製品。もうこれ以上、そうしたものを作りたくない。自分自身が使いたくなるようなもの。自分が作りたいものだけを作ってきた』彼らは「美術工芸品」を否定するものだと語る。なぜならば、美術品は鑑賞の為の装飾だが、つむぎは消耗するもの、用途のある工芸品であるからだ。現代社会の平均所得の中で、相手の納得を得るだけの価格で「いいもの」を作る……そうしたことを格別の気負いを見せるだけでなく、静かに実行して来た。合理性と科学性を追って、経済効果をすべてに優先させて来た現代の機械文明だが、行方に横たわる疑問によく人々が気づき始めたきのうきょう、彼らの行き方は今後ますます肥大する工業化社会の中で、クラフトの生きる道への摸索であり、提言だったと云えるかもしれない。また木工、漆、ゆす箸、陶器などを連帯させた工芸村構想も持っていると云う。

竹工、木工においても宮崎氏は若いグループに大いなる期待を持って次のように云う。「別府の人達は、大量生産大量消費の生産パターンになってしまった為に、せっかくの腕を持ちながら内職への材料配りと、編みかけ品を集めする運転手になってしまっている。全く残念なことである。こんな中で『このままでは別府の竹製品はだめになってしまう。本当の竹製品作りを目指そう』と呼びかけあって活動している会がある。『まだけ会』という……生産業者の中堅の人々である。週1回研究会を開いている。研修旅行を毎年1回、グループの作品発表会を数回開いた。クラフトフェアには大挙して京都の会議に参加して研鑽を図っている。今一步の努力をして産地別府のイメージアップの先導的役割を果たしてもらわねばならない。もう1つの新しいグループがある。それは甲斐治夫氏（JDCA、KCDA会員）を中心とする『グループ別府クラフト』による人達である。こちらは最初から新しい生活の為のものづくりを目指している。その為には、新しいクラフトは新しい流通機構を作らねばならないとして、自分達で積極的に市場開拓を展開している。そしてこのグループに続く若い人達が、別府産工試の中堅技術者養成の研修生として今年も育つつある。この若い人たちが技術を習得すると同時にクラフトマンとしてのポリシー気質をつかんで一人前になり、産地に定着した時に、竹のクラフトは日本人の生活環境に大きく貢献できることであろう。また日田でも『ものづくり日田』というグループが生れた。東京のプラスチックのデザインをやっている青年が『使い捨ての為のデザインはやめた』といつて、竹の仕事をする為に日田にやって来る事になった。従来竹ではデザインを充分に踏まえたクラフトマンがいなかったので、デザインの仕事をして来た人の転身をたのしみにしているところである』

また手仕事が一方の極だとすればその反対の極であるようなコンピューターによる精緻な木材加工によるクラフト（プロセスシートを図面よりおこし、N Cルーターにセットすると小物が均一化された状態で出来上る）のような今日的状況の報告も生々しい。

この本を読み終えると改ためて地方公立試験場の方々の活やくを再認識せざるを得ないだろう。宮崎の工芸村構想を進めている黒木進氏、日田のグループを育てた宮崎珠太郎氏や時松辰夫氏、また塩塚豊枝氏や中川千年氏、森正洋氏、柏崎栄助氏など、デザイナーとして、又は業界のリーダー、教育者として活やくの方々の多くは試験場の職員あるいは、その先輩達であった。

巻末にある編者の「ふるさとものづくり 私のクラフト地図」は九州全域を網らしている。各企業やグループ、作家個人個人まで8年間かけてつながりを持たれた記録であって、非常にくわしくそれぞれの物づくりの方向をつかんでいる。

この本の編集コンセプトとして、辻公也氏の「クラフトは多少とも反復生産が可能で、あくまでもそのものが持つ素材美、形状、色彩、機能性、模様が総合され、さらに温かく、経済性を踏まえるものであってほしい」という考えが全編に浸透しており、非常に多方面の収録の本にもかかわらずよく統一のとれたものになっている。私達が身のまわりの美と、手づくりの価値を再考するのに有益であろう。辻氏は「8年間の取材を通して悩んだのはものづくりの解釈であり、クラフトの解釈であった。作家とクラフトマン、クラフトマンとクラフトデザイナー、民芸との関係も未だ未解決のままである。このように、ものづくりの探訪の尺度が決まらず、ものの位置を曖昧にした。」と書かれているが、陶磁器、ガラス、金属、和紙、石についての続編「続九州のかたち 現代の工芸」の出版に期待をかけたい。

京都市工業試験場 佐藤 敏二